

# 『竹取物語』の会話文

——「侍り」をめぐる——

関 一 雄

はじめに

物語文学の会話文は、物語という芝居の舞台上に登場してくる人物（役者）が相互に交わし合うセリフであり、語り手による地の文が描き上げる人物の動き（演技）と情景（背景）と、その時間の流れの中で、セリフが交わされることよって、全てが実現する。『源氏物語』以前の成立とされるいわゆる昔物語『竹取物語』『落窪物語』『うつほ物語』等の会話文の多さも物語の始発のあり方として自然に了解されよう。

本稿はこのような考え方に立ち、昔物語の会話文について、特に『竹取物語』のいわゆる丁重語「侍り」の用法を中心に私見を述べたものである。

『竹取物語』に入る前に『うつほ物語』の会話文の例に触れておく。

「としかげ」巻と「藤はらの君」巻から各一節を引用する。

（引用本文は野口元大校注『うつほ物語(1)』（校注古典叢書）による）  
1かくて、としかげ、日本へかへらむとて、波斯国へ渡ぬ。その国

のみかど・后・まうけの君に、このことを一づ、たてまつる。みかど、おほきにおどろき給て、としかげをめす。まゐれるに、こ

とのよしをくはしくとひ給て、の給はく、「このたてまつれることのこゑ、あらきところあり。しばしひきならしてたてまつれ」との給。「人のくにの人なれば、わたりてひさしくなりにけり、そのほどは、いたはりて候はせん」との給へば、としかげ申す、「日本に年八十歳なるち、は、侍しを、みすて、まかりわたりにき。今はちりはひにもなり侍にけん。しろきかばねをだにみたまへむとてなん、いそぎまかるべき」と申す。みかど、あはれがりに給て、いとまをゆるしつかはす。（としかげ 一三三頁）

かくて、そちのぬし、おんなをめして、ゆ「かのふみは、たてまつりしめてきや。」ゆ「おんな、ゆ「めのとこ、いとよくきこえ申さん、とのたうびで。御返はかならずあらん。たうばりてまうでこむ」と申す。ぬし、ゆ「はやきたれ」といふ。おんな、ながとがもとにいきて、ゆ「この御返給はりにぞ、まうできつる。」ゆ「ながと、かへし給へりといはで、ゆ「いづれのよばひぶみの返しをかは、ひとたびにはのたまはん。たび／＼の中にこそ、ひとたびもし給はめ。」ゆ「おんな、ゆ「さらば、ぬしの君の御もとに、おとゞの御ふみを、ことのよしきこえて、たてまつれ給へ。」ゆ「ながと、ゆ「いとよきこと也」とて、（藤はらの君 一三五頁）

1 「としかげ」巻の例は、俊蔭が日本へ帰ろうとして、波斯国へ渡り、その国の帝らへ琴を献上したところ、帝は驚いて俊蔭を呼び、琴について話をする場面である。この会話文では、その前後に「の給はく」「の給」とあって、帝のセリフであることを、明示している。また、俊蔭が帝に言うセリフには、おなじく前後に「申す」「申す」とある。

次に2 「藤はらの君」巻の例は、滋野真菅がて宮に求婚しようとして、その乳母の長門に仲介を頼むべく、おんな(姫)に話しかける場面である。この会話文では「としかげ」巻と違って、いきなり地の文から真菅のセリフに移るが、その中に「しめ(しむ)」「きたれ(きたる)」のようないわゆる「漢文訓読語」が真菅特有の役柄語(注として用いられているのが注意される。また、真菅と姫、姫と長門のセリフの初めと終わりを示す語は無い(ゆを付した箇所)。

1 「としかげ」巻のような会話文の示し方を、かりに「としかげ型」、2 「藤はらの君」巻のような「役柄語」などで示すものを「藤はらの君型」と呼ぶことにする。「竹取物語」では、会話文の内容によって両者が併用されていると考えられる。

(注)「役柄語」については、拙著『平安物語の動画的表現と役柄語』(二〇〇九年・笠間書院)で、次のように定義した。

『竹取物語』『うつほ物語』『落窪物語』『源氏物語』等の地の文には使われず、会話文に限って使われる語。会話主体が日常的に用いたであろうとされる用法(キヤラ語と仮称)と、普段は日常には用いない主体が様々な緊張した場面、強い語気・語調で、意図的に発する用法とがある。

前者は、主として身分の下位の者が、上位の聞き手に使うもので、場面によっては畏まり(卑下謙遜)に近い意味合いを帯びることがある。後者は、上位の者が下位の者を叱責する意味合いを帯びることもある。

滋野真菅の場合は、右の前者に当たるとしたいが、引用の場面では真菅より下位の姫に対して使っており、極めて特異である。このような用法は、会話文であることを明示するために、物語作者により考案された表現技法であり、役柄語の二用法と考える。

真菅のセリフに見られる特異な用法については、拙論「昔物語の会話文に込められた登場人物のキヤラー」『うつほ物語』の「ほに」の試解―(梅光学院大学日本文学会「日本文学研究」第四七号(二〇一二年)で詳述した。

#### 一 姫と翁との会話の「侍り」

最初にかぐや姫と竹取の翁とのセリフのやりとりでの「侍り」を見る。

(引用本文は堀内秀晃校注『竹取物語』(新日本古典文学大系)による) 次は、翁が姫に結婚を勧める場面である。

翁、かぐや姫に言ふやう、

「我子の仏、変化の人と申ながら、こゝら大きさまでやしなひたてまつる心ざし、をろかならず。翁の申さん事は聞き給てむや」

と言へば、かぐや姫の、

「なに事をか、のたまはん事は、うけたまはらざらむ。変化の物に待けん身とも知らず、親とこそ思たてまつれ」

と言ふ。翁ゆ、

「うれしくものたまふ物かな」と言ふ。ゆ「翁、年七十にあま  
りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、おとこは女に  
婚ふことをす、女は男に婚ふ事をす。そののちなむ、門ひろく  
なり侍る。いかでか、さることなくてはおはせん」ゆ

（貴公子たちの求婚 七―八頁）

右では、翁の最初のセリフは「としかげ型」で示され、姫のセリ  
フは「藤はらの君型」と「としかげ型」、続く二つの翁のセリフは  
「藤はらの君型」が勝るといふ示され方である。これに続く場面は、  
前掲の翁の結婚の勧めに対し、姫のセリフは、先ず、

かぐや姫のいはく、

「なむでう、さることかし侍らん」

と言へば、（貴公子たちの求婚 八頁）

と「としかげ型」で示される。ここで注意されるのは、結婚を拒否  
する短いセリフの中に「侍ら（侍り）」が使われていることである。  
姫は丁重に断っているのである。ところが翁は、執拗に結婚を勧め  
る。

「変化の人といふとも、女の身持ち給へり、翁のあらむかぎり  
は、かうていますかりなむかし。この人、の、年月をへて、か  
うのみいましつゝ、のたまふことを、思ひさだめて、一人一人に  
婚ひたてまつり給ね」

と言へば、かぐや姫のいはく、

\*「よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、  
後くやしき事もあるべきをと、思ふばかり也。世のかしこき  
人なりとも、深きこころざしを知らでは、婚ひがたしと思」

と言ふ。（貴公子たちの求婚 八―九頁）

姫の比較的長いセリフ\*は「としかげ型」で示され、「侍り」は使  
われない。翁の執拗な結婚の強要に反発している姫の口調が、この  
ように「としかげ型」による会話を明示する表現技法によつて表  
されていると考える。つまり、前の姫のセリフは、翁の結婚の要求  
に我慢しながらも、丁重に「侍り」を使用しているのであるが、執  
拗に迫られて「侍り」を用いない無敬語表現になったのである。

次は物語の終わりに近く、七月十五日の月に眺め入る姫を氣づ  
かつて声を掛けた翁に応える姫のセリフである。

かぐや姫ゆ、

「見れば、世間心ほそくあはれに侍る。なでう、物をか嘆き  
侍べき」

と言ふ。（かぐや姫の昇天 六一頁）

翁の心配を氣遣つて、丁重な口調で応じている。しかし八月十五日  
になると、姫の嘆きは隠しようもなくなり、ひどく泣きじゃくる。  
翁と姫が尋ねかけるのに対し、姫の告白がなされる場面となる。

かぐや姫、泣くく言ふ、

「〔前略〕いままで過ごし侍りつるなり。「さのみやは」とて、  
うち出で侍りぬるぞ。をのが身は、この国の人にもあらず、  
月の都の人なり。（中略）さらずまかりぬべければ、おほし嘆  
かんが悲しきことを、この春より思ひ嘆き侍る也」

と言ひて、（かぐや姫の昇天 六二―六三頁）

右のように、両親が心配するのに対して、丁重な表現で応じてい  
る。

そして、いよいよ月よりの迎えが来る直前になって、姫は翁との

別れを悲しみ、自分がいなくなった後の翁嫗の老後を案じた真情のこもったセリフを、どこまでも丁寧に話す。前掲の例と同じく、「侍り」の多用と、セリフであることを明示する「としかげ型」が用いられている。

かぐや姫、いはく、

「(前略) いますがりつる心ざしどもを、思ひも知らで、まかりなむずる事の、口おしう侍り。ながき契のなかりければ、「程なくまかりぬべきなめり」と思ふが、かなしく侍る也。(中略) 今年ばかりの暇を申つれど、さらに許されぬよりてなむ、かく思ひ嘆き侍る。御心をのみ惑はして去りなむことの、かなしく、たへがたく侍る也。かの都の人は、いとけうらに、老いをせずなん。思ふこともなく侍る也。さる所へまからむずるも、いみじくも侍らず。老いおとろへ給へるさまを、見たてまつらざらむこそ、恋しからぬ」

と言ひて、(かぐや姫の昇天 六八頁)

さらに月へ帰って行く姫に、翁が自分を連れていってくれ、と泣いて縋るのに対して、姫は惑乱しながらも、丁寧な手紙を書き残す場面が、次のように続いている。

「文を書きをきてまからむ。(後略)」

とて、うち泣きて書く言葉は、

此国に生まれぬるとならば、嘆かせたてまつらぬほどまで侍らで、すぎ別ぬる事、返、本意なくこそおぼえ侍れ。(後略)

と書を書く。(かぐや姫の昇天 七二頁)

このように、姫は、まれに翁に強い口調で迫る無敬語表現で応えることはあるものの、基本的に養父母に対して極めて丁寧に接して

いることが分かる。そのセリフは、主に「としかげ型」で明示されている。

## 二 姫から帝への「侍り」

この節では、かぐや姫が帝に対して用いた「侍り」を見る。

(帝) 類なくめでたくおぼえさせ給てゆ、

「許さじとす」

とて、いておはしなさんとするに、かぐや姫、答へて奏す、

「そのが身は、此国に生れて侍らばこそつかひ給はめ、いとおはしませんがたくや侍らん」

と奏す。御門ゆ、

「なか、さあらん。猶いておはしなさん」

とて、御輿を寄せ給に、このかぐや姫、きと影になりぬ。「はかなく、口おし」とおぼして、「げに、たゞ人にはあらざりけり」とおぼしてゆ、

「さらば、御ともにはいて行かじ。もとの御かたちとなり給

ひね。それを見てだに帰なむ」

と仰せらるれば、(帝の求婚 五七頁)

右の場面での姫の帝へのセリフは、さすがに丁寧である。ところで、帝のセリフ中の「おはしなさん(おはします)」は、自身の動作に言っており、「自敬表現(自己尊敬)」と呼ばれるものである。これについては後述するが、ここで注意されるのは、そのセリフでは「自敬表現」であるが、次のセリフでは「いて行かじ」と、対等の表現になっていることである。帝の姫への気持ちの変化がこの言葉に続く「御かたちとなり給ひね」という姫を尊敬する表現となつて

いることが注目される。

右のような帝の姫に対する自敬表現から対等表現へ、さらに尊敬表現へのセリフの変化に、頑なであった姫も心を動かされたのであろう。その後の場面には、

御返り、さすがに憎からず聞こえかはし給て、おもしろく、木草につけても、御歌をよみて遣す。(帝の求婚 五七頁)

と、二人の熱愛とも見られる描写が記されている。

そして別れの最後に、帝(朝廷)に残す手紙は、セリフと同じ丁寧な文言でなされている。

いみじくしづかに、朝廷に御文たてまつり給。あはてぬさま也。

(前略)宮仕へつかうまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば。心えずおほしめされつらめども、心強く、うけたまはずなりにし事、なめげなる物におほしめしとゞめられぬるなん、心にとゞまり侍ぬる。

とて、(かぐや姫の昇天 七三―七四頁)

### 三 王慶・家来・侍女ら下位者から上位者への「侍り」

火鼠の皮衣、からうじて人を出だして求めて奉る。いまの世にも昔の世にも、此皮は、たはやすくなき物也けり。昔、かしこき天竺の聖、この国に持てわたりて侍ける、西の山寺にありと聞きよびて、朝廷に申て、からうじて買ひとりて、奉る。値いの金すくなしと、国司、使に申しかば、王慶が物加へて、買ひとり。いま金五十両賜はるべし。(後略)

(火鼠の皮衣 二七頁)

右の手紙は、王慶から右大臣に送られた二通目のものである。追

加金を催促するのに、最初の手紙では使われなかった「侍り」を用いている。「からうじて」を繰り返す一方、丁寧な表現で催促する商人のしたたかさがよく表れている。

次の例は、家来・侍女らが主人に申し上げるセリフで使われた「侍り」である。

又、人の申やうは、

「大炊寮の飯炊く屋の棟に、つくのあなごに、燕は果を食ひ侍る。それに、まめならむをのこともをいてまかりて、あぐらを結びあげて、うかゞはせんに、(後略)」と申。

(燕の子安貝 四三頁)

倉津麻呂が、申やう、

「(前略)あな、いにおどろくしく廿人の人の上りて侍れば、あれて、寄りまうで来ず。(後略)」

と申。(燕の子安貝 四四頁)

近く使はる、人、竹取の翁に告げていはく、

「かぐや姫の、例も月をあはれがり給へども、このごろとなりては、たゞことにも侍らざめり。いみじくおほし嘆く事あるべし。(後略)」

と言ふを聞きて、(かぐや姫の昇天 六〇頁)

守る人くゝのいはく、

「かばかりして守る所に、はり一つだにあらば、まづ射ころして、ほかにさらんと思ひ侍る」

と言ふ。(かぐや姫の昇天 六六頁)

右のような「侍り」は、当時の身分の絶対的な格差を反映した基本的な用法である。ただし、竹取の翁に侍女とおほしき「人、」が

言うセリフと帝から遣わされた「守る人く」が翁に言うセリフは「としかげ型」の「いはく言ふ」で明示されており、その前の倉津麻呂から中納言への「申す」で示されるのは違っている。これは聞き手の翁の身分が低いことを表しているものである。

次の例も、身分の高くない「ある人」が、帝に申し上げたことを明示する「奏すく奏す」であるので、ここに加えておく。

ある人、奏す、

「駿河の国にあるなる山なん、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。(富士の煙 七六頁)

#### 四 姫・翁から内侍・帝への「侍り」・帝の自敬表現としての「侍り」

本節で取り上げる「侍り」は、丁重表現のものと、自敬表現(自己尊敬)としての用法のものである。

女に、内侍のたまふ、

「仰せごとに、かぐや姫のかたち、優におはす也、よく見てまいるべきよしのためはせるになむ、まいりつる」

と言へば、

「さらば、かく申侍らん」

と言ひて、入ぬ。(帝の求婚 五〇頁)

女、内侍のもとに還り出てゆ、

「口おしく、このおさなき者は、こはく侍る者にて、対面すまじき」

と申。(帝の求婚 五二頁)

右の女(姫)のセリフの前者の「侍ら(侍り)」は、女自身の動

作を謙譲する表現であり、後者の「侍る(侍り)」は姫の動作(状態)「こはく(こはし)」の謙譲表現である。後者で注目されるのは、翁と姫は自邸では姫に向かつては尊敬語を使っているが、ここでは姫は身内であり、内侍の背後にある帝を意識した表現である、と見られるのである。次も、翁が姫を身内として、帝に対して言うセリフである。

翁(中略)まいりて申やう、

「前略 宮つこ麻呂が手に産ませたる子にもあらず。むかし、山にて見つけたる。か、れば、心ばせも、世の人に似ず侍」と奏せさす。(帝の求婚 五六頁)

ここまで引用した「侍り」は、前節までに述べた丁重語としての用法で説明できる。ところが、

御門(中略)仰せ給、

「汝が持ちて侍るかぐや姫、たてまつれ。顔かたちよしと聞こしめして、御使を賜びしかど、かひなく、見えず成りにけり。かくたいくしくやは慣らはすべき」

と仰せらる。翁、かしこまりて、御返事申やう、

「此女の童は、たへて宮仕へつかうまつるべくもあらず侍るを、もてわづらひ侍る。さりとも、まかりて、仰せ事賜は

ん

と奏す。(帝の求婚 五三頁)

右の前者、帝のセリフの「侍り」は、同じセリフ中の「たてまつれ(たてまつる)」「聞こしめし(聞こしめす)」「賜び(賜ぶ)」と同じく、二節で述べた「自敬表現」と呼ばれるものである。自敬表現を認めない説は、ここを侍臣の取り次ぐ表現、あるいは、語り手

の帝への敬意の表現などとする。しかし、二節で述べたように、至尊としての帝が自らを尊敬する表現から、対等表現に、さらには姫を尊敬する表現に移っていく過程を見事にセリフで表しているとする私見は、これに従えない。後者の翁の「侍り」はこれまでに述べた丁寧な表現での用法である。

次の二例も「宮つこ麻呂」(翁)のセリフの「侍り」も同じものである。

宮つこ麻呂が、申やう、

「いとよき事也。なにか、心もなくて侍らんに、ふと行幸して御覽ぜむ、御覽せられなむ」

と奏すれば、(帝の求婚 五六頁)

翁、答へて申、

「かぐや姫をやしなひたてまつること、廿余年に成ぬ。「片時」との給に、あやししく成侍ぬ。(後略)と言ふ。

(かぐや姫の昇天 七〇頁)

前者は翁から帝へ、後者は翁から月の王へのセリフである。

## 五 大納言・中納言の自敬表現と絶対敬語の考え方

大伴の御行の大納言は、わが家にありとある人、召し集めて、のたまはく、

「竜の頸に、五色に光る玉あなり。それ取りて奉りたらむ人には、願はんことをかなへん」

とのたまふ。(竜の頸の玉 三三三頁)

大納言の、の給。

「天の使といはんものは、命を捨てても、をのが君の仰ごと

をばかなへんこそ思ふべけれ。(中略)いかに思ひてか、きんじら、難きものと申すべき」φ(竜の頸の玉 三三三頁)

右の大納言の二つのセリフで、「わが家にありとある人」(家来)の動作に「奉り(奉る)」「申す」を用いている。これは、この話に続く中納言も同じである。

中納言よろこび給て、φ

「おかしき事にもあるかな。もつともえ知らざりつる、興あること申たり」

との給て、(燕の子安貝 四二頁)

(中納言)倉津麻呂かく申を、いといたく喜びて、のたまふ。

「こゝに使はるゝ人にもなきに、願ひをかなふことの流れつた」

との給て、御衣ぬぎてかげ給つ。

「さらに、夜さり、この寮にまうで来」

との賜て、つかはしつ。(燕の子安貝 四五―四六頁)

中納言が、家来や倉津麻呂の動作に「申(申す)」「まうで(まうづ)」を用いている。これらは、身分の上位の者が下位の者の動作を謙讓させ、自らを尊敬する用法であるから、自敬表現と認めてよいであろう。管見に入ったこの物語の注釈書では、西田直敏氏の言

う「天皇語」(注)についてのみ自敬表現を認めているが、前節の帝(天皇)のセリフ中の「侍り」「たてまつる」の用法を合わせ見れば、これも自敬表現と説明して支障はない。

ここで、大納言の次のセリフに注目したい。

大納言、起き居てのたまはく、

「汝ら、よく持てこずなりぬ。竜は、鳴る神の類にこそあり

けれ。(後略)

とて、(竜の頸の玉 四〇頁)

大納言が初めのセリフでは自敬表現を用いて、家来たちに竜の頸の玉を「取りて奉りたらむ」と命じたのに比べると、自らが船に乗り、遭難しそうになって命からがら浜にたどり着いた場面で、見舞いに参上した家来たちに言ったセリフでは、「持てこずなりぬ」であって、「持て参らず」ではない。ここには家来たちが「竜の頸の玉は、いかゞ取らむ」と言ったことの道理を身をもって知り、反省と後悔の気持ちに対等表現で示されていることが分かる。これも二節で、帝が姫を「たゞ人」ではないと知った後は、「いて行かじ」「御かたちになり給ひね」と対等表現・尊敬表現になったのと通ずるものがある。

(注) 西田直敏『敬語 国語学叢書』(一九八七年)・『自敬表現』の歴史的研究』(一九九五年)・『日本人の敬語生活史』(一九九八年)等を参照。

#### 六 まとめ―存疑の用例に触れて―

御子、のたまはく、

「命を捨てて、かの玉の枝を持ちて、来たる」とて、「かくや姫に、見せてまつり給へ」

と言へば、翁、持ちて入りたり。(蓬萊の玉の枝 一七頁)

右の例、引用本文の校注者は、とてを地の文として、二つの会話文とみるが、後の会話主体について脚注は付さない。このセリフは、翁を聞き手になされてたものであり、御子(くらもちの皇子)のセリフとすると、謙讓語「見せ」たてまつり(たてまつる)」と

尊敬語「給へ(給ふ)」とも不自然である上に、地の文の「言へ(言ふ)」も「のたまへ(のたまふ)」とあるべきである。そこで、家来のセリフと考えたいが、そうとしても不自然さは残るところである。

「中略」の給しにたがはましかばと、この花をおりてまうできたるなり。(後略) (蓬萊の玉の枝 二二頁)

これを御子聞て、ゆ

「こ、らの日ごろ思ひわび侍る心は、今日なん落ちぬぬる」

とのたまひて、(蓬萊の玉の枝 二二頁)

この二つは御子のセリフで、前者はくらもちの皇子が玉の枝を採るために遙々と蓬萊の山まで海路の旅をしたと偽る長話の一節である。「の給(の給ふ)」はかくや姫への尊敬語であろうが、ここでは不自然である上、御子自身を謙讓した「まうで(まうづ)」も同じく不自然である。従って、後者のセリフ「侍る」も翁を聞き手に用いるのは皇子として不適切である。しかしながら、姫に対して「のたまふ」を用いた例は、

御子たち、上達部、聞きて、ゆ

「おいらかに、「あたりよりだに、なありきそ」とやはのたまはぬ」

と言ひて、うんじて、みなかへりぬ。

(貴公子たちの求婚 一一二 一三頁)

かくや姫のたまふ様にたがはず、つくり出でつ。

(蓬萊の玉の枝 一五頁)

のように、前者はセリフ、後者は地の文に表れる。前掲のくらもちの皇子のセリフの例と合わせ考えると、皇子のかくや姫に求婚する

熱愛の表現ではないか、と考えたくもなるのである。もとより絶対敬語の時代にこのような敬語表現があったとは考えにくい。しかし、二節と四節で述べたかぐや姫に対する帝の自敬表現から対等表現への変化、更には姫への尊敬表現など、加えて大納言の家来に向かって言う敬語の変化も考え合わせると、存疑の例を物語作者の間違いか、転写の際の誤りとも断定してしまいたくないのである。

このように『竹取物語』に見られる敬語の表現は、絶対敬語から相對敬語に移行していく過程と見るのが通説であるが、「絶対敬語」を支える事象を疑う福島直恭氏(注)の通説に対する批判的考察も考慮にいれる必要があると思う。

(注) 福島直恭『幻想の敬語論―進歩史観的敬語史に関する批判的研究』(二〇一三年)。この書の主張を端的に要約すれば、「自敬表現の存在が絶対敬語の時代があったとする通説(進歩史観的敬語史)の証左とはならない」というもので、右に挙げた存疑の例なども福島説によった方が解決に導かれやすいように思う。勿論、『竹取物語』のみから、福島説の適否を論じられるものではない。この書から研究者は通説に対し、常に批判的であるべきことを、改めて教えられた。

本稿は、主にかぐや姫が竹取の翁を聞き手として言うセリフが、翁に対する姫の気持ちの変化とどうかかわっているかとする視点から、「侍り」の使われるセリフと使われないセリフを対比検討してきた。結論として養父である翁と、娘である姫との間では相對敬語が用いられていると認める。一方、姫が帝を聞き手として言うセリ

フでは、必ず「侍り」が使われ、通説に従えば、絶対敬語の用法となる。更にセリフのやりとりの中でセリフ部分を明示する「としかげ型」が有効な表現技法として機能していると考えられることを合わせ論じた。

参照注釈書・坂倉篤義『竹取物語』(日本古典文学大系) 一九五七年

／松尾聰『校注竹取物語』一九六八年／上坂信男『竹取物語全

訳注』(講談社学術文庫) 一九七八年／野口元大『竹取物語』(新潮日

本古典集成) 一九七九年／片桐洋一『竹取物語』(新編日本古典文学全集

一九九四年／堀内秀晃『竹取物語』(新日本古典文学大系) 一九九七

年／上原安藤・外山「かぐや姫と絵巻の世界」二〇一二年／大

井田晴彦『竹取物語 現代語訳対照』二〇一二年

(せき・かずお)